

1. 教育の責任

健康栄養学部は、管理栄養士として社会に貢献できる健康と栄養の専門家としての能力や素養を備えた人材の養成を目標としている。そのためには、管理栄養士として基本的な知識や技術を学び、様々な問題に柔軟に対応できる力を身につけ、さらには自ら積極的に行動することにより、課題を見つけ、それを解決していく力を開発するために、以下の科目を担当している。

「食品学総論」（講義、春学期、2単位、健康栄養学部必修科目）

「化学基礎実験」（実験、春学期、1単位、健康栄養学部必修科目）

「食品学実験」（実験、秋学期、1単位、健康栄養学部必修科目）

「卒業研究」（演習、通年、4単位、健康栄養学部選択必修科目）

「特別演習Ⅰ～Ⅳ」（演習、春学期・秋学期、各2単位、健康栄養学部選択科目、オムニバス）

2. 教育の理念

STUDY FOR LIFEに基づき、豊かな教養と専門的学術、旺盛な自己開発精神、優れた国際感覚及び問題解決能力を備えた人材を育成するという本学の教育目的をふまえ、管理栄養士としての使命や尊厳を自覚し、学習を積み重ねることにより、全ての人に最良の栄養教育（食・栄養・健康・医療などに関する高度な専門的知識）を提供できるような人材を育成することを教育理念としている。

3. 教育の方法

（1）授業実践の工夫

「食品学総論」では、各項目の最後にまとめのプリントを配布し、授業での振り返りをおこなっている。また、半期で教科書1冊を終了させる必要があるため、なるべく教科書に沿って授業を展開し、重要な箇所は教科書に直接書き込みをさせている。学生には覚える内容が多い科目であるため、化学的な内容についてはできるだけ平易に理解をしやすいように、身近な例を出して説明をおこなっている。

「化学基礎実験」および「食品学実験」では、班単位で実験に取り組むため、なるべく全ての学生が授業に参加しやすいように少人数の班単位による授業をおこなっている。また、講義で習った内容を実験で再確認できるような内容として、より理解が深められるように配慮をおこなっている。学生により実験結果に対する理解度は大きく異なるので、教科書を使用し、何度も丁寧な説明をおこなうようには気を付けている。

「卒業研究」では今までの受動的に受けてきた講義や実験授業と異なり、学生自身が自分で課題に取り組み、課題を探求するために学生自身が深く考察できるように指導している。

（2）総合的な学修成果達成のための工夫

「食品学総論」では、上記（1）に示したように、各項目のまとめのプリントを配布して、さらには解答も配布することにより、各自、何度も復習をおこなうように指導をしている。また、将来の国家試験受験に向けてどの点が重要であるかを明確にして、理解が深められるように配慮をしている。

「化学基礎実験」および「食品学実験」では、事前に半期分の実験内容を記したプリントを配布し、1回目の授業では半期の授業内容を説明することにより、事前に実験内容を把握してもらえるように、毎回の予習をするように促している。また、実験終了後は各自レポートを作成し、授業の振り返りをおこなっている。また、提出されたレポートは毎回添削を行い、学生に返却している。学生には返却されたレポートを必ず確認するように指導を行っている。

4. 教育の成果

（1）授業見学・授業アンケート等の内部評価

ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学 所属：健康栄養学部 名前：北川 雅啓 作成日：2026年1月25日

「食品学総論」では、化学が苦手な学生に対しても理解しやすいように基本的な部分も含めて説明した。そのため、毎年、学生は授業評価に高い点数をつける学生が多く、また、よく理解できたという意見が多かった。ただ、暗記する内容が非常に多く、なかには暗記が苦手な学生も増えているため、どうすれば、克服できるのか、今後考えていく必要がある。

「化学基礎実験」では、なぜ、化学の実験をおこなうのか、また管理栄養士の仕事にどう繋がっていくのかが見えにくいため、授業の意義なども理解しにくい科目といえる。さらに化学に関する知識が少ない学生が多く、化学計算やレポートの書き方等も難しく感じ、考察の書き方がわからなかったという意見もあった。そのため、予めテーマを設定することにより、調べてほしい、または理解してほしい項目を明確に示している。

「食品学実験」では、春学期に既の実験をおこなっていたこともあり、ある程度の実験に対する理解が深まっているため、授業の初めに簡単な実験操作の説明をおこない、最後に実験結果に対する説明をおこなった。実験授業の内容が講義科目である食品学総論の復習を兼ねているが、より理解が深まるように教科書を使用し、できるだけゆっくり、丁寧に実験の結果に対する説明をすることにより、内容がよく理解できたという意見が多かった。

(2) 学会・研究会、高大連携、産学連携等における外部評価

学内の大原先生と共同研究という形で、数年おこなってきた卒業研究のデータを見直し、必要な箇所は再度、実験おこなうことより、論文としてまとめ、学外の学術雑誌に投稿することができた。今後は、さらに研究を深めていきたいと考えている。

5. 改善への努力と今後の目標

特に「化学基礎実験」や「食品学実験」では、最終的な結果を求めるために化学計算が多く出てくる。高校時に化学を選択していない学生が多く、化学に関する内容がわかりにくのは仕方がないと考えており、そのため、理解しやすいように、なるべく平易に説明をおこなっている。しかし、数年前より、計算（算数）が出来ない学生が増えているように思われ、この点に関しては、学生によりかなり差があること、また、単純な計算の手法について細かく説明すると授業時間が足りなくなるため、そこまでは十分な説明をしていない。また、レポートは全て PC を使い、作成させている。そこで、計算ができない、レポートの書き方がわからない、ワードやエクセルの操作ができない学生に対しては、1年生のアドバイザーからは学修支援センターの利用を学生に勧めてくれているようで、私からもこれらの学生については積極的に利用するようにアドバイスをしている。学生の質も年々低下しているようで、今後も難しい課題であると思われる。

【添付資料】

なし